

霞

—2015年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

平成27年10月1日発行(通巻第32号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(32) 古写真 「藤塚山からの展望」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(32) 1
- 博物館からのお知らせ 1
- 【館長講座、特別公開、テーマ展他】
- 古代の常陸甕(古代) 2
- 源海(中世) 3
- 平次郎の晴れ舞台(近世) 4
- 金属回収されなかった土浦幼稚園の鐘(近代) . . . 5
- 市史編さんだより 6
- 地域と博物館 7
- 霞短信「伝え手と受け手」 8
- コラム(32) 8
- 情報ライブラリー更新状況 8

藤塚山(現下高津一丁目)は、土浦市役所があった場所です。前方の煙突が見えるところは霞ヶ浦海軍病院(現霞ヶ浦医療センター)でした。土浦市役所は前川町(現中央二丁目)から昭和38(1963)年に藤塚山へ、そして今年の9月に土浦駅前に移転しました。

【情報ライブラリー検索キーワード「役所」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

10月11日(日)・12月13日(日) 12月13日は午後2時~(1時間30分程度)

テーマ:「古墳時代箱式石棺の世界—東アジアから霞ヶ浦沿岸へ—」 会場:博物館視聴覚ホール

※10月11日(日)は史跡めぐりです(詳細はお問い合わせください)

★★特別公開「土屋家の刀剣—国宝・重要文化財の公開—」★★

9月9日(水)~10月4日(日) 土浦藩土屋家に伝わった刀剣の名品をご紹介します

★★テーマ展「戦争の記憶—土浦ゆかりの人・もの・語り—」★★

10月24日(土)~12月6日(日) 博物館が収蔵する戦争に関わる資料を中心に紹介します

○展示案内会 10月31日(土)、11月14日(土)、12月6日(日)

いずれも午前11時・午後2時からの2回開催予定

○歩いてたどる戦争の記憶 市内に残る戦争ゆかりの地をめぐります

11月3日(火)文化の日 午前9時半~正午 (10月16日(金)から受付開始 定員30名)

○土浦二高茶道部によるお茶会 11月3日(火)午後1時~3時 (無料・先着50名様)

★★文化財愛護の会写真展★★

★無料開館のお知らせ★ 11月3日(火)文化の日、11月13日(金)県民の日

★今年度の秋季展示は10月1日(木)~12月27日(日)までです

※秋季展示期間の休館日は月曜日(10月12日、11月23日は開館)、および10月13日(火)、11月4日(水)・24日(火)、12月24日(木)です



博物館マスコット
亀城かめくん

ひたちがめ
古代の常陸甕

—常陸地域に広がる生活必需品

市内の奈良時代から平安時代のムラの跡を発掘調査すると、素焼きの甕^{かめ}が必ずと言ってよいほど見つかります。この甕は土師器^{はじき}と呼ばれる在地で生産された褐色の土器で、当時の人々にとって生活必需品でした。常陸から下総地域で出土し、分布の中心は常陸国南部にあることから、常陸甕とも呼ばれます。その初源は古墳時代後期（6世紀後半）までさかのぼり、奈良時代（8世紀）に入ると大量生産され供給範囲も広がり、平安時代前期（10世紀）の終末にその終焉を迎えます。この甕の供給には伝統的な流通網を基盤に、古代官道^{くわんどう}の整備などによる新たな物流の要素が反映されています。

常陸甕の特徴は、高さが30cmを越え、口の部分が大きい反面、底が小さく、全体にやや不安定な器形です。口の部分は鋭くつまみあげられ、側面にはヘラのようなもので縦方向に磨いた筋が密に見られます。そして、底面には木葉^{このは}を敷いて製作した痕跡が認められます。数ある器種の土器の中で煮沸^{しやぶつ}に適した唯一の調理具として重要な役割を担い、竪穴住居内のカマドに設置して、直接加熱して使用されました。このような加熱される土器は消耗が激しいため、ムラの跡で数多く出土します。

この甕の表面や割れ口を観察すると、白雲母^{しろうんも}や長石^{ちやうせき}などの鉱物がたくさん含まれていることが分かります。これらは市内北部を含む筑波山塊南東部で産出する花崗岩^{かこうがん}が風化したものであり、同所がこの甕の産地であることを示しています。市内北部の今泉に位置する根鹿北遺跡^{ねしかきたいせき}では、奈良時代（8世紀）の大規模な土器製作用粘土^{まいくつこう}の採掘坑が見つかり、その中からほぼ完全な形の常陸甕が多く出土しました。この状況は、同遺跡が常陸甕製作の原料となる粘土の採取地であるとともに、その周辺で土器生産も行われていたことを暗示しています。そして、粘土採掘坑から多く出土した甕は、歪みや欠損などのみられる不良品として廃棄されたものと考えられます。

もともと、筑波山塊南東部付近は関東地方でも有数の須恵器^{すえき}の生産を行なった新治窯跡群^{かまあとぐん}が存在することで知られ、土師器の甕のみならず須恵器も含めた在り土器の一大生産地であったことを物語っています。

（関口 満）



常陸甕（根鹿北遺跡）当館所蔵



根鹿北遺跡の土器製作用粘土の採掘坑

11/28（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 石橋北遺跡出土の土師器甕（当館所蔵）
- 長峯遺跡出土の土師器甕（当館所蔵）



げんかい
源海

はんによし
一般若寺の鐘に名を残す僧侶

市内穴塚の地には、多くの文化財を伝える古刹、般若寺があります。境内の一角にある鐘楼には、鎌倉時代建治元(1275)年の年号が刻まれた銅製の鐘があります。国の重要文化財に指定されており、土浦・等覚寺、潮来・長勝寺の鐘と並んで常陸三古鐘の一つに数えられています。

鐘には、「大日本國常州信太庄般若寺」という書き出しで始まる銘文があります。ここに「大勸進源海」という僧侶の名が見えます。勸進とは、一般には寺院の建立・修復などのために、信者や有志に説き、その費用を奉納させることを意味します。般若寺では、この鐘の鑄造を源海という僧侶が主導したことを示しています。

源海の生没年など詳しいことはわかっていませんが、鎌倉時代に大きな勢力をもっていた仏教の宗派の一つ、西大寺流律宗の僧侶であったようです。西大寺流律宗とは、奈良西大寺で戒律復興に努め、民衆の救済事業などに力を尽くした叡尊の門流で、鎌倉時代に急速な広がりを見せました。建長4(1252)年、叡尊の弟子の忍性が常陸に下向し、東国への布教が始まります。このとき、律宗の拠点となった寺院の一つが土浦の般若寺です。

源海も、忍性と同じく叡尊の弟子でした。叡尊の弟子を書き上げた交名のなかに「常陸国人 源海 実道房」とあります。また、律宗の僧侶を書き上げた「西大寺光明真言結縁過去帳」のなかにも、「実道房 常陸般若寺」「如一房 同寺」「乗円房 同寺」と見えます。律宗寺院として寺容を大きく整えた般若寺の事実上の開山が源海で、その跡を継いだのが如一房・乗円房であったと考えられます。

源海は、止観に通じていた僧でした。止観とは、仏教の瞑想法の一つで、心を乱さず知恵を起し観察することを指します。同じ頃常陸にいた無住房道暁は、その著『雑談集』で源海の止観の講義を聴いたことを記しています。また、金沢文庫に伝わる書状(「氏名未詳書状」)にも、「志々塚」(＝般若寺)で行われる止観の講義を聴きにいく旨が書かれています。これも恐らく源海によって講じられたものと思われます。源海の講義は鎌倉にまで聞こえるもので、また関東各地から律僧を迎えるほど般若寺が整備されていたこともうかがえます。

道暁が源海の講義を聴いたのは彼が29歳の時で、忍性の常陸下向から間もない1255年頃のことになります。律宗寺院としてスタートした当初から、少なくとも鐘が鑄造された1275年まで20年以上にわたり源海は般若寺に止住したと考えられます。般若寺の発展の基礎を築いた源海、その墓塔と思われる五輪塔(茨城県指定文化財)が、今も境内の西側にあります。

(堀部 猛)



般若寺銅鐘(複製品)

* ご紹介した史料は、いずれも『土浦関係中世史料集 上巻』(1冊:2000円)で見ることができます。

10/3(土) 11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも中世コーナーに展示)

- 西大寺光明真言結縁過去帳(複製、原資料は奈良西大寺所蔵)
- 氏名未詳書状(複製、原資料は金沢文庫所蔵)



へいじろう
平次郎の晴れ舞台
— 深川三十三間堂通し矢

土浦藩士西川平次郎 25歳が享和2（1802）年4月11日、深川三十三間堂での通し矢に成功しました。藩邸はもちろん、江戸でもうわさになったことでしょう。

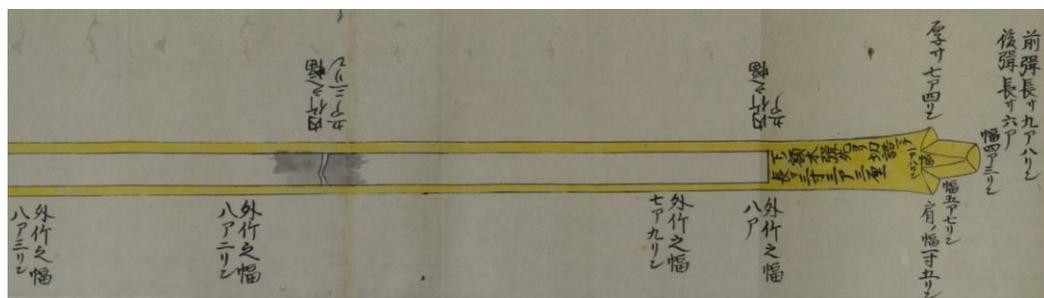
通し矢とは、遠距離的に矢を射通すことで、江戸時代に盛んに行われました。「百射」「千射」、朝から日暮れまで行う「日矢数」、日暮れから翌日の日暮れまでの「大矢数」など種類がありました。

深川三十三間堂は富岡八幡宮の東側にありました（現江東区富岡、今は江東区立数矢小学校が建つ）。京都東山の三十三間堂での通し矢の流行をうけて、寛永19（1642）年11月、浅草に三十三間堂を模した堂が建てられたのがその始まりです。元禄11（1698）年、火事で焼失してしまいましたが、同14（1701）年深川に場所を移して再建されました。弓の腕前を競う人々が通し矢を行い、その度に大勢の観客が詰めかけました。

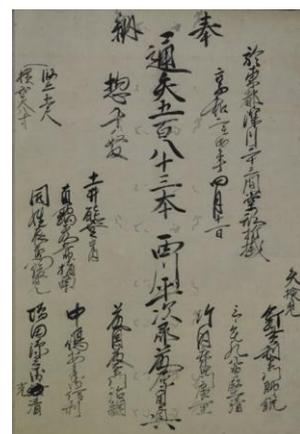
古文書「土浦藩士深川三十三間堂通し矢一件」は長い巻物です。これによると、平次郎は「千射」に挑戦し、約120m先の的に1000本の矢を射たうち583本が射通ったと書かれています。現代の弓道競技での射距離は近的で28m、遠的で60mです。平次郎は12歳から日置流弓術を学び、強弓を数多く引けるよう鍛錬してきたのです。「通し矢一件」には、平次郎が当日引いた弓の図（長さ約213cm）、指南（弓の師匠）2名と矢検見6名の氏名、平次郎を賛美する漢詩などが書かれています。

8代藩主土屋英直は、次のように褒めました。「遠空に響き達し、殊に春秋に富む、豪気勃々として、英名当世に著る、清風宇内に播く、感激弥いよ深し、称誉弥いよ厚く、寔に熊渠の侶なるかな」（出典「通し矢一件」原漢文）。熊渠とは中国楚の人で、虎だと思って草原の石を射たところ、石に矢が立ったという故事があります。弓の名人を引き合いにして平次郎の技を称えました。

西川家は土浦藩が小藩だった寛文2（1662）年、初代次郎兵衛が召し抱えられ、その後代々が用人、番頭、年寄、家老など要職をつとめた知行500石の上級藩士です。平次郎はその6代で、のちに頼母と改名して9代藩主彦直を支えました。（木塚久仁子）



平次郎が用いた弓「土浦藩士深川三十三間堂通し矢一件」（部分）当館所蔵



通し矢の結果（部分）

11/7（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 阿部正弘書状 土屋寅直宛（当館所蔵）
- 土屋彦直一行書「青松多寿色」（当館所蔵）



金属回収されなかった土浦幼稚園開園の鐘

—130年の歴史を今に伝える

前回の「霞」第31号で、戦時下において金属回収されたもの・されなかったものの例をお伝えしました。今回は回収されなかったものの一例として、今年創立130年を迎える土浦市立土浦幼稚園（以下土浦幼稚園）に残る「開園の鐘」についてご紹介します。

『土浦幼稚園創立百周年記念誌』によると、この鐘は、戦後に園庭から見つかったもので、戦時中の金属回収を避けて埋められたと考えられています。土浦幼稚園は明治18（1885）年に土浦西小学校（現土浦小学校）の附属幼稚園として誕生しました。鐘は小学校の元校長であった進士義道が漢詩を詠み、開園の際寄付したもので、内側にその名が刻まれています。

（漢詩）

稚児入園	如子慕母
母也能慈	子何肯負
智徳与体	維教育首
助長宜誠	時習可久
進退周還	規矩循守
黽勉從事	啓蒙无咎
明治十八年八月	
竹陰義撰	



土浦幼稚園開園の鐘
（土浦幼稚園所蔵）
高さ一八・〇×径二一・四
（単位はセンチメートル）

（漢詩意訳）幼い子どもたちが入園してくる。子どもが母親を慕うように。母親が心をこめて慈しむならば、子どもはどうしてこれにそむくことがあるだろうか。智育・徳育・体育というのは、教育の根本である。これの速成を望むあまりかえって事を害することをくれぐれも^{いまし}誠めるがよい。教えをくりかえし習うには、長い期間を必要とするものである。教育する者としてのたちいふるまひは、人間としての道をよく守り従い、努力してその職にたずさわり、子どもたちの啓発にあたるならば、大きなあやまちはないであろう。（『土浦幼稚園創立百周年記念誌』より）

教育を急ぎ過ぎないこと、人間としての道を守り努力をして教育にあたること、教職員（当時は保母といいました）の心得などが示されています。開園当時は小学校もまだ無償でない時期（小学校の尋常4年・高等4年のうち前者が無償になったのは1886年）でした。そのような中で、校長坂本祐一郎らが中心となって開園し、幼児教育を大切だと考えた教職員の熱心さやそれを理解し協力した地域の人たちの存在が、幼稚園が現在まで存続することにつながっています。

戦争に関する行事や儀式が優先される戦時下においては、子どもひとりひとりの成長を見守ることを説くこの鐘は、その金属という材質からも、その刻まれた内容からも、鐘として存在しにくいものだったかもしれません。戦時下を越えて今に残る鐘は、一世紀を超える幼児教育の歩みと、戦争と平和を今一度私たちに考えさせてくれます。

（野田礼子）

10/24（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 青い目の人形（土浦幼稚園所蔵）
- 墨塗りされた楽譜（土浦幼稚園所蔵）



市史編さんだより

— 『土浦関係中世史料集 上巻』 余録 —

今年3月完成した上記史料集について、編修に至った経緯や内容構成などはその緒言に譲るとして、ここではその後分かったことなどを紹介しながら、苦心の一端をご推察頂きたいと思えます。

その一つが史料の選択の苦勞です。地理的に、或いは政治や宗教面で、土浦との関係の有無や濃淡を判断することが結構難しいのです。例えば、史料集Ⅲ二1で採用するかどうか迷いながら、結局載せなかった文書「北畠顯信御教書」があります。それは次の文書です。

「 (花押)
吉見伊与守参常州候、無為[]候之様可被相計候旨仰候也、仍執達[]
四月廿二日 宮内少輔清顯[]
白河修理大夫殿 」

花押は袖判と呼ばれ、北畠顯信のものでこの文書を書かせた人、以下の文は右筆と呼ばれる家臣、宮内少輔であった五辻清顯が書いたものです。[]内は紙の下端ですり切れ、読めない部分です。最初の[]内は、無為が無事とか平穩という意味ですから、通行できるようという意味の字だったと思われます。執達の次の[]は決まり文句で「如件」の筈です。署名の後の[]は「奉」で、顯信の命を奉じて書いたということを表し、小字で右に少しずらして書きます。このような形式の文書を奉書といい、袖判があるのを袖判奉書といいます。また三位以上の公家の出すこうした文書を御教書ともいいます。

清顯について、史料集Ⅲ二1(5)の清顯書状の注で「北畠顯家軍に属していたらしい」としましたが、正しくは顯信軍でした。顯家は延元3(北朝の暦応元<1338>)年に戦死しています。また「関城繹史」からの引用として(この部分は略しています)「桜雲記称五辻少納言」も載せましたが、この少納言は顯尚の可能性が有ります。

吉見伊与(予)守は史料集Ⅲ二4(9)の「結城文書」、興国2(北朝の暦応4<1341>)年7月8日の宣宗書状に「昨日も武蔵国住人吉見彦次郎等降参了」とあり、小田城に来たことが分かります。『尊卑分脈』『続群書類従』の「吉見系図」には

源範頼 — 範円 — 為頼(吉見二郎) — 義春 — 義世 — 尊頼(義宗、南朝方)
— 頼宗(彦三郎)
— 頼氏(彦四郎)
— 頼房(彦五郎)

とあり彦次郎はみえないのですが、「関城書考」(巻5)は「分註桜雲記」を引いて彦次郎頼武とします。この書状の日付は4月22日なので、翌3年とみて「関城繹史」では「顯信欲乘勢援常陸、謀之親朝」とします。

興国3年はもう関城の戦いになっています。私が利用したのは平成5年の白河集古苑『白河結城文書』でしたので、五辻清顯も結城親朝も奥州に居り、吉見伊与守は武蔵の人ですから、小田には関係が薄いと、採用しませんでした。書架に置き忘れた平成8年発行の重要文化財指定記念『中世結城家文書』を見つけ、それを見るうちに北畠親房の許に行くと推測されるのだから採用すべきだったかと動揺したのです。従って下巻の補遺編に加えようかとも思うのですが、ゆっくり考えてみます。なおついでですが、史料集の目次Ⅱ三「小田氏系図」は「小田氏系譜」と訂正します。9の小田氏譜を含むので、「図」より「譜」のほうがよいと修正したのですが、目次をそのままにしまったのでした。ミスや取りこぼしと思われる所を見つけられた方はお知らせ頂けるとありがたいと思えます。(市史編さん係社会教育指導員 雨谷昭)

地域と博物館

博物館をつくる（５） ～博物館づくりを支えた人々～

昭和 63（1988）年 7 月にオープンした当館は、昭和 60（1985）年から本格的な開設準備に取りかかりました。充分とは言えないながら、およそ 3 年半をかけて完成した博物館には、多くの人々が関わっています。当初、準備室に配置された専従職員は 3 名（事務職 1、学芸員 2）だけでしたので、博物館の性格から資料収集や展示の内容に至るまで、博物館づくりは先人とその業績、地域の人々など多方面からの大きな力に支えられました。

博物館の中味を具体的に検討するため、歴史専門の有識者を中心に数名からなる博物館ワーキンググループが組織されました。博物館法に基づく本格的な博物館を目指すこと、地域資料の調査研究と情報センターの役割を果たすことなど基本方針が決められました。実施設計に向けて、月 2 回程度、約 1 年間に及ぶ有識者の検討会が精力的に行われました。資料の収集・保存を第一に考え、収蔵庫の広さや配置が優先して検討され、将来の資料増加に向けて収蔵庫の増設スペースも用意されました。また、常設展示は児童生徒にも理解しやすいように、土浦地域の歴史を通史で紹介することとし、検討会において展示シナリオの章立てまで具体化されました。

通史展示のシナリオには、昭和 50 年に刊行された『土浦市史』が役立ちました。『土浦市史』は、地元高等学校の先生方を中心とする編さん委員によって、およそ 10 年をかけてまとめられたもので、地域史の推移や集成された資料が博物館の展示構成や展示資料の選定に活かされました。博物館の展示は叙述で語るより「モノ」で語ることを特徴としており、実物の展示資料が必要不可欠です。博物館をつくるに際し、指定文化財など把握されている以外にどれだけの資料が市内に残されているのか、市民の団体である土浦市文化財愛護の会に調査員をお願いし、数ヶ月かけて市内資料の^{しっかい}悉皆調査を行いました。また市外にも目を向けて、他機関や個人が所蔵する土浦関係資料の所在調査も行い、博物館に収集することを考えました。過去に大学が調査した市内遺跡の出土資料もそのひとつで、博物館づくりを契機に、茨城県内や都内の各大学にご理解いただき、調査資料の博物館への移管が実現しました。

実物資料以外に、展示資料として模型や映像の製作も行いました。土浦城ほか県指定文化財の富岡家住宅など歴史的建造物の復元模型は、古建築の専門家とともに、土浦市建築士会青年部の皆さんがほぼ 1 年がかりで現地調査や資料調査を行い、詳細な設計図が作成されました。近世、近代に霞ヶ浦水運に活躍した高瀬船の 5 分の 1 の模型は、市内在住の高瀬船の船大工、故鈴木国蔵さん（鈴木造船所）の尽力で完成しています。また、すでに行われなくなっていた地域の伝統稲作や霞ヶ浦の伝統漁業を、市内大岩田の篤農家、故坂本栄次郎さんや霞ヶ浦漁業協同組合連合会の皆さんの協力で再現することができました。その伝統と技術は記録映像として保存され、今でも博物館で生きています。（塩谷 修）



富岡家住宅（『土浦の文化財』より）
模型は、上の住宅の屋根裏や建具まで、
建物すべてを実測し、復元しています。

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、当館の元非常勤職員尾嶋泰実さんに寄稿していただきました。

伝え手と受け手

江戸時代、土浦城下の水戸街道沿いは土浦宿として賑わっていました。中でも、中城町（現中央一丁目）は商業の中心地で、今も往時の繁栄を思わせる商家の家並がみられます。私はこの界隈で生まれ育ちました。そこからほど近い、土浦城西門があった付近には私の通った中学校があります。ここに堂々たる門構えで佇むのは、土浦藩の藩校郁文館の正門です。当時の私は、これら建造物の歴史的背景を考えるには及ばず、当たり前前の景色として眺めていただけでした。

時は流れ、ご縁あって、私は平成24年から土浦市立博物館の業務に携わることになり、3年間土浦城二の丸跡へ登城(!)しました。博物館での業務は多種多様でした。校外学習では、昔の道具や藩主土屋家の刀剣などについて小学生の皆さんに解説するのですが、どうすればうまく伝わるか試行錯誤しました。本誌「霞」の編集では、集まってくる原稿を繰り返し読むことで私自身大変勉強になりました。特別展のお手伝いもさせていただきました。第35回特別展「幕末動乱—開国から攘夷へ—」では歴史探訪コーナーを担当、幕末に思いを馳せ、いくつかの史跡に足を運びました。第36回特別展「次の世を読みとく—色川三中和幕末の常総—」では三中が友人たちと交わした手紙の一部を翻刻する機会をいただきました。こうして、かつて何気なく過ごしていた郷土の歴史を、様々なかたちで皆様に伝える側になれたことは、非常に感慨深いものでした。

土浦には、それぞれの時代の豊富な資料があり、それらが保存されている博物館があり、資料を調査・研究し発信してくれる博物館職員が存在します。伝える側と受け取る側双方の立場を経験した私としては、受け手の存在が増えることを願ってやみません。多くの方が博物館で生の資料に触れ、故きを温ねて新しきを知る機会を持っていただければと思います。
(元非常勤職員 尾嶋泰実)

コラム(32) 戦争の思い出—記憶を後世へ

今年には戦後70年にあたります。各地で終戦の8月の時期を中心に、様々な企画が実施されました。博物館では、今年度から戦争体験の聞き取り調査を行い、活字化する作業を進めています。聞き取りは、太平洋戦争当時、土浦で戦争を体験された方、土浦に通勤・通学された方、あるいは現在土浦市民の方が対象です。

実際に戦争を体験された方の多くが他界、あるいはご高齢となる中ではありますが、できるだけ様々な立場の方々の声に耳を傾けていきたいと考えています。生命を無情に脅かす戦争によってもたらされたつらい・悲しい記憶を辿ることは、苦しい作業であるとは思いますが、若い世代が平和な世の中を築いていく礎となるよう、どうか皆さんの思い出をお聞かせください。
(野田礼子)

*聞き取りのためのアンケート調査を実施しています。ご協力をお願いいたします(詳しくはお問い合わせください)。

情報ライブラリー更新状況

【2015・10・1現在の登録数】

古写真 552(+5)
絵葉書 459(+5)

※()内は2015年7月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ)

2015年度

秋季展示室だより(通巻第32号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2015年度秋季展示は、2015年10月1日(木)~12月27日(日)となります。「霞」2015年度冬季展示室だより(通巻第33号)は2016年1月5日(火)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。(カラー)